

平成 25 年 11 月 2 日  
大阪府教育委員会

## 芹生谷遺跡現地公開資料

### はじめに

大阪府教育委員会は国道 309 号河南赤阪バイパス建設に伴って、河南町芹生谷で芹生谷遺跡(せるたにいせき)の発掘調査を継続して実施しています。前年度に引き続き、金山古墳(かなやまこふん)の西に接する地区について、平成 25 年 7 月より 4500 m<sup>2</sup>を発掘調査しています。

芹生谷遺跡は葛城山系の西斜面に位置し、古代から南河内と大和を結ぶ交通路として栄えました。周辺は河南台地と呼ばれるゆるやかに傾斜する耕作地が広がり、現在も条里地割による水田区画を良好にとどめます。

今回調査地のすぐ南東には国史跡金山古墳(双円墳・全長 85.8m)があり、古墳の営まれた 6 世紀後半には、この地で活躍した豪族がいたようです。前回の調査では、6 世紀後半の 4 棟の堅穴住居(たてあなじゅうきょ)が発見されました。今回調査では、古墳時代後期の溝(みぞ)と中世の耕作溝や土坑(どこう)などが発見されています。

### 調査成果

現在、南北長さ約 200m、東西幅約 12m にわたって発掘調査をしています。調査区は南半分を 1 区、北半分を 2 区とし、一部は埋め戻しています。

1 区は遺構面の大半が後世の水田耕作などで削平され、良好には残っていませんでした。ただし、1 区のもっとも高所にあたることから、12 世紀末頃の中国製白磁碗・土師質土器皿(はじしつどきさら)などが発見されました。木の棺に副葬品をいれて、直接埋めた土坑墓が、付近にあったのかもしれませんが。

2 区も水田耕作で大半が削平され、遺構は良好に残されていませんでした。一部の地域に耕作溝や土坑が残されていました。

2 区の中央から長さ 52m 以上、比高差 2m 以上を測る南北溝 2-2 が発見されました。溝は深いところで 1.2m を測ります。砂や礫でいっきに埋没しており、南側では上面があふれて周囲に砂の広がりが見られました。溝の底から古墳時代後期の須恵器蓋杯(すえきふたつき)・壺などがみつかりました。南北溝 2-2 の上流と一部重複して、北にのびる南北溝 2-1 がみつかりました。南北溝 2-1 の下層からは鎌倉時代から江戸時代までの土器や陶磁器が出土しました。溝はコンクリート製の水路となって近年まで機能していました。

水田耕作のための水路は古墳時代後期にはじまり、条里水田に沿って南北に切り替えられ、近年まで使い続けられたのかもしれませんが。

### 中国製白磁碗

1 区中央から直径 15.2cm、高さ 5.1cm を測る完形の白磁碗が発見されました。碗の底部は削り出しによる高台で、乳白色の釉薬(うわぐすり)が二重にかけられ、口縁端部が玉縁(た

まぶち)状にふくらむ特徴的なものです。中国福建省の閩南沿海窯(びんなんえんかいかま)で、12 世紀末頃に焼かれたものです。

源平合戦で平氏が滅亡するまでは、京都や博多の商人を通じて中国南海部の茶碗や壺などが関西に数多くもたらされました。今回発見の碗はその最終段階のものと思われます。

13 世紀になると、源氏は鎌倉に政治拠点を置いて、独自のルートで中国商人と交易を始めます。この交易では中国南海産の白磁はもたらされず、北宋の官窯だった浙江省龍泉窯(りゅうせんがま)で焼かれた青磁碗などがもたらされるようになるのです。

今回発見された碗は高台の端部(畳付け)が丁寧に磨きこまれ、漆器の盆などにのせて食器とされていたことがうかがえます。ただし、口縁端部に小さな欠けがみられます。これは墓に副葬する時の儀礼かかもしれません。



写真 1 1 区全景(左に金山古墳)

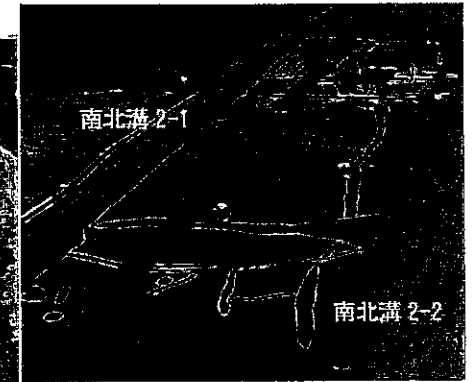


写真 2 2 区南北溝 2-1 と南北溝 2-2



写真 3 中国製白磁碗

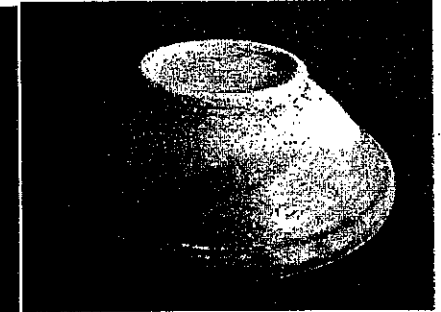


写真 4 同、裏面

